

領域	令和元年履修状況	沼市立津谷小学校	実践	成果	課題と改善策	A B C D 評定
<b>重点目標 1 家庭や地域等と連携した創意ある学校づくりの推進</b>						
(重点目標1) 家庭や地域等と連携した創意ある学校づくりの推進	1 コミュニティ・スクールとしての取組	○協議会の充実	<ul style="list-style-type: none"> <li>協議会における話し合いの活性化のため、委員へ資料の事前配布を心がけた。</li> <li>協議会のスムーズな進行のため、会長と担当者間で事前打合せを実施した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>資料の事前配布を行ったことで、各委員が事前に読み込んで参加したことから熟議が深まった。</li> <li>協議の議長を務める会長と担当者で進行について打合せを行ったことで、90分以内の会議時間に収めることができた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>次年度は、学校からの提案だけではなく、委員の方から報告及び協議案件を事前に挙げていただき、会長と協議の上、議題に盛り込むなどの工夫を行っていきたい。</li> </ul>	B
		○学校経営への反映	<ul style="list-style-type: none"> <li>協議会からの要望を受け、学校経営に反映できよう努力した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>次年度教育計画に反映させることができ、より安定した計画を策定することができると考えている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>内容によっては、津谷小・小泉小とのすり合わせが必要なものがあるのではないかな。</li> </ul>	A
		○学校、地域の連携	<ul style="list-style-type: none"> <li>マンボウサンバ大会をはじめ、各地域のイベントや太鼓での出演など、積極的に参加できるように部活動等を調整した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>地域の行事に参加することで子どもたちの地域に対する意識が変わってきた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>地域活動への参加と教員の働き方改革の関係をどう解決するか。</li> <li>部活動との関係をどうするか。</li> </ul>	B
	2 迅速で積極的な教育活動情報の提供	○日々の連絡体制	<ul style="list-style-type: none"> <li>マチコミによる保護者とのきめ細かな連絡体制の確立を図った。</li> <li>学校日より、学級通信の発行を通して学校の様子を伝えた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>予定の変更や確認など随時行うことができた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>全員が登録し、情報を共有しているか定期的に確認する必要がある。</li> <li>マチコミを登録することで、他のメールがはじかれることがある。</li> </ul>	A
		○学校ホームページによる情報発信	<ul style="list-style-type: none"> <li>日々の教育活動の情報発信を行った。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>日々の子どもたちの活動を日記形式で知らせることができた。</li> <li>そのほか、同窓会や学校運営協議会、学校日よりなどをアップし、広く伝えることができた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>誰が見ているか分からないという恐怖心から、掲載できる情報を制限しなければならない。</li> <li>肖像権の問題がある。</li> </ul>	A
	3 学校と保護者間での生徒の課題や成果、目標の共有	○担任と保護者との連携	<ul style="list-style-type: none"> <li>やりとり帳の活用して担任、保護者間で連絡調整を行った。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学校生活や家庭での様子について、家庭と共有することができ、共通歩調で生徒を支援することができた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>家庭の教育力の向上を図るための手立てを教えていく必要がある。</li> </ul>	B
		○学年PTAの活性化	<ul style="list-style-type: none"> <li>学年行事等を通して会員相互の親睦を図った。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学年親子行事では、企画から運営まで役員が積極的にアイデアを出すなど学校への協力体制が高まった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>役員以外の保護者をより多く引き込むための方策を今後考えていく必要がある。</li> </ul>	B
	4 PTAとの連携・協力体制の充実	○学校課題の共有と課題解決に向けた連携活動の充実	<ul style="list-style-type: none"> <li>学校での諸課題に対し、必要に応じてPTAとも協議の上、解決を図った。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>事ある毎に会長を中心にPTA本部役員が集まり、協議したことで課題がスムーズに解決できた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>一般会員への情報提供の仕方が課題である。</li> </ul>	B

できた A—D できなかった

領域	令和元年 沼市立澤登頓学校	実践	成果	課題と改善策	ABCD評定	できた A—D できなかった
5 地域人材の活用	○教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間での活用	・「御岳太鼓」,「浜太鼓」の地域講師を招き、伝統文化の継承に積極的に取り組んだ。	・地域や学校行事での太鼓演奏を通じて生徒の地域参画に対し、期待が一層高まった。	・来年度は、公民館単位で実施している「協働教育プラットフォーム事業」を活用した取組を計画している。	A	
6 協働型学校評価の実施	○自ら進んで挨拶する子どもの育成	・PTAや地域及び高校とも連携して取り組んだ。	・11月下旬に本吉響高校生徒会と両校のPTA役員とで行ったあいさつ運動を機に、相互の関係性が深まった。	・つぎにどうつなげていくかが課題である。	B	
<b>重点目標2 確かな学力と自立する力の育成</b>						
(重点目標2) 確かな学力と自立する力の育成	1 「分かる・できる」を実感させる授業づくり	○校内研修の工夫	・授業改善のための「5つの提言」を意識した研究授業を1人1回実施した。	・計画通り全6回の研究授業を実践し、研究主題である「自ら学び、考え、表現できる生徒の育成」に迫ることができた。	・端的な実践授業になりつつある。他教科とのつながりを意識したり、課題をリレー使用しながら、よりよい実践事業を進めていきたい。	B
		○TT授業による個に応じた指導の充実	・特に個人差が著しい数学、英語の授業を複数教員で取り組んだ。	・個別学習に入った時に、1人の教師が少人数を担当することで指導の効率化が図られた。	・特に支援を必要とする生徒が各学級に2～3人いる。その他にも予備軍もいるため支援する生徒を共有した上で、さらに効率的に指導できるようにしたい。	B
	2 自ら学び、考え、表現する生徒の育成	○日常的に「読む」「書く」「話す」活動時間の設定	・学級毎に自らの考えを書き、自分の考えを深める時間を設定し、実践した。	・自分の考えを「書く」ことで、より自分の考えを深めることができた。	・自分の考えを深めることができたが、今後は相手を意識し、さらに自分の考えを深めさせたい。	B
		○授業や集会、行事等で伝える力を重視した言語活動の充実	・生徒集会や各種行事等で生徒が発表する機会を意図的に設定した。	・全校生徒の前で話すことにより、相手に伝わるための工夫を図ることができた。	・自分の考えを述べる際には、相手を意識した発表を心がけるようにさせたい。	B
	3 家庭との連携による家庭学習習慣の定着	○「家庭学習のすすめ」の活用	・全学年1日2ページの自学ノートに毎日取り組ませた。	・家庭学習の習慣化し、ほぼ全員が自学ノートを提出することができた。	・自学ノートをすることだけが家庭学習になってしまい、自分が苦手な領域についてするまでに至っていない。各教科で自学の内容について、具体的に伝え、有意義な家庭学習を目指したい。	B
4 各種検定試験への積極的な取組	○公的能力検定試験の推奨	・漢字検定……年3回実施した。 ・数学検定……年2回実施した。 ・英語検定……年2回実施した。	・身近なところで公的能力検定試験を実施することで都市部の子どもたちの格差を縮めるとともに、子どもたちの意欲喚起につながった。	・日程調整と子ども、保護者への広報の仕方が課題である。	B	

領域	令和元年年度	沼市立澤登頓学校	実践	成果	課題と改善策	ABCD評定	できた A—D できなかった
育 成	5 志教育の視点をもった教育活動	○進路選択や将来の職業選択に生かす体験学習の設定	・職業体験をはじめ、福祉体験、ボランティア体験などを実施した。	・各種体験活動を通し、様々な方々とふれ合うことができ、貴重な経験と進路学習への参考になった。	・当日の天候次第で計画を変更せざる得なくなる。	B	
	6 異校種間の円滑な接続に留意した教育活動の推進	○津谷小・小泉小との連携	・授業体験や部活動体験などを実施した。	・小学生が興味を示したことで、中学校への期待度が高まったと感じた。	・見学マナーの問題が出てきた。	B	
		本吉響高校との連携	・部活動における合同練習の実施 ・生徒会主催の合同あいさつ運動の実施	・今年度交流の第一歩を気付くことができた。	・今後可能な限り交流を拡大したいいきたい。	A	

**重点目標3 豊かな心や健やかな体の育成**

1 共に高め合う学級づくり・居場所のある学校づくり	○互いに尊重し、よさを認め合える人間関係づくりの構築	・壮行会等の行事で、互いに認め合う自主的な活動を行った。	・縦割りの活動を通して、3年生が中心となり、互いに声かけを行う姿が多く見られた。	・今後も生徒同士の良い関係をどのように継続していくかが大切である。	B	
	○自尊感情・自己有用間の高揚に向けた教育活動の工夫	・生徒会執行部を中心とした自治的活動を重視し、各行事において自主的活動を推進した。	・生徒は、各行事で周囲と協調しながら自信を高めていった。	・人前で自信を持って発表等できるよう、多くの経験を今後積み重ねていきたい。	B	
2 いじめ根絶	○学校としての「いじめ防止」に対する取り組み	・いじめに関するアンケートを実施し、内容に応じて対応する。 ・年2回いじめ問題対策委員会を開催し、取組や状況について報告及び協議する。	・アンケートから浮き彫りになったことに対し、組織的に対応することができた。 ・委員会において、本校の現状を開示すると共に地域からの情報を得たことで、学校と地域で連携して対応していくことができた。	・アンケートの実施時期や回数など見直す必要がある。	B	
	○生徒が「いじめ防止」に積極的に関わる活動	・生徒集会におけるいじめ防止の呼びかけを行う。 ・県教委主催「いじめゼロ」CMコンクールへの参加。	・生徒会自体は一生懸命取り組んでいた。	・多くの児童をどう巻き込んでいくかが課題である。	B	
	○情報モラルの積極的な推進	・生徒及び保護者に対し、機会をとらえて研修会等を実施する。	・子どもたち対象と親子対象の研修会を実施したことにより、伝えたい内容が浸透した。	・スマホ、ゲームなど家庭での取り扱いやルールが課題である。	C	
(重点目標) 3 集団生活のルール遵守	○基本的な生活習慣の定着と規範意識の高揚	・早寝、早起き、朝ご飯運動の啓発を行う。 ・あいつ運動をとおして、規範意識を高める。	・定期発行の学校だよりに常に「早寝、早起き、朝ご飯」のロゴを入れて啓発を行った。	・各家庭に意識の差があることから一律には難しい。	B	

領域	令和元年年度	沼市立澤登町中学校	実践	成果	課題と改善策	A B C D 評定	できた A—D できなかった
領域(3) 豊かな心や健やかな体の育成	4 生徒会活動の充実	○自治的・自発的活動の促進	・生徒集会や各委員会活動を定期的に開催することで生徒の自治的・自発的意識を高める。	・月1回の生徒集会や委員会を通して、生徒の意見が取り入れられた生徒会活動になった。	・毎月同じことの繰り返しになる部分もあることから、新しい取組を入れ、慢性的な活動にならないようにしたい。	B	できた A—D できなかった
		○主体的に「提案」し、地域へ「発信」する生徒会活動の推進	・本吉響高校との合同あいさつ運動。	・はじめての活動により、地域を考えた取組への意識が高まった。	・継続した取組を行っていききたい。	B	
	5 生徒の成就感・達成感を高める魅力ある体験的行事	○体育的行事	・地区中総体及び新人大会への取組。 ・体育祭への取組。 ・冬期間における部活単位での体力トレーニング。	・各部とも大会へは意欲的に参加していた。 ・体育祭を午前開催にし、内容を絞ったことは良かった。	・夏場は熱中症の問題が活動を左右することが多かった。 ・体育祭と市民運動会を一緒に行うことができないか。	B	
		○文化的行事	・文化祭への取組。 ・席書大会への取組。	・内容を精選し午前開催にしたことにより、教員も子どもも集中してできた。	・展示においては、暗い体育館ではなく、校舎内を活用してもよいのではないか。	B	
		○体験活動	・1学年職場体験学習。 ・2学年上級(専門)学校訪問。 ・3学年ボランティア体験学習。 ・3学年地域の太鼓	・どの学年も真剣に取り組んでおり、報告書もしっかりまとめていた。	・どのように継続していくかが課題である。	A	
	6 自己管理能力の育成	○けが等の発生件数の減少	・自己の身体バランスを調整したり危険を予測する力を高めさせるよう手立てを講じた。	・高い技能に挑戦した上ででのけがや不注意によるけがが多かった。	・自己の身体バランスを整える補強運動や運動前の準備運動の意義についての指導が必要である。	B	
	7 災害に積極的に向き合う知識と能力の育成	○防災教育の充実と交通安全	・避難訓練(不審者、地震・津波、火災)及び引渡訓練の実施。 ・地区生徒会での危険箇所マップづくりの実施。	・非常時の対応について、生徒・職員共に確認することができた。 ・地区内の危険箇所について情報確認及び情報共有を行うことができた。	・訓練について想定を工夫し、様々な場面での適応能力を伸ばしたい。 ・校内掲示だけでなく、広く情報を共有できる工夫を図りたい。	A	
	8 心のケアの充実	○養護教諭やSC及びSSWと連携した相談体制	・いじめ不登校担当を中心にしたSC, SSW, 養護教諭との情報交換を実施。 ※SC(スクールカウンセラー), SSW(スクールソーシャルワーカー)	・多角的に生徒の情報をとらえることができ、対応することができた。	・定期的な情報交換会や連携した対応をさらに行っていききたい。	A	
	9 安全・安心な学習環境の整備	○定期的な点検	・安全点検の結果を受け、優先順位を付けて整備した。 ・対応年数を把握し、計画的に市教委に改善要望を提出した。	・素早く見通しを持って取り組むことができた。 ・旧小泉中学校の物品を有効活用することができた。	・学校全体の配当予算が他校に比較して少ないことから、市教委に要望を出している。	C	